

茂原市四十前遺跡

—茂原環状線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—

平成20年3月

千葉県土整備部
財団法人 千葉県教育振興財団

も ばら し じゅう まえ
茂原市四十前遺跡

— 茂原環状線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 —



序 文

財団法人千葉県教育振興財団は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その結果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第599集として、千葉県県土整備部の茂原環状線建設に伴って実施した茂原市四十前遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、弥生土器や古代の土器が出土するなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また地域の歴史資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成20年3月

財団法人 千葉県教育振興財団
理 事 長 福 島 義 弘

凡　例

- 1 本書は、千葉県県土整備部による、茂原環状線建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県茂原市小林1376ほかに所在する四十前遺跡（遺跡コード210-008）である。
- 3 発掘調査から報告書に至る業務は、千葉県県土整備部の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の編集・執筆は、上席研究員西野雅人が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県県土整備部、茂原市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 使用した地形図は、下記のとおりである。

第1図 茂原市役所発行 1/2,500茂原市基本図

第2図 国土地理院発行 1/25,000地形図「茂原」(N1-54-19-12-3、昭和63年発行)

- 8 空中写真は「国土画像情報（カラー空中写真）国土交通省」昭和58年度C17-7 (ckt-83-2_c17_7.jpg) を使用し、トリミング、文字等の追加をしてモノクロで掲載した。
- 9 図面の方針は、世界測地系に基づく座標北である。

本　文　目　次

序文	
凡例	
I　調査の経緯と経過	1
II　遺跡の位置と環境	1
1　遺跡の位置と自然環境	1
2　周辺の遺跡	4
III　調査の概要	4
IV　検出した遺構と遺物	7
1　遺構	7
2　遺物集中遺構・遺構外出土遺物	7
V　まとめ	15
報告書抄録	卷末

表　目　次

第1表　出土遺物	12
第2表　出土遺物集計	14

挿　図　目　次

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第2図　遺跡周辺の地形	3
第3図　調査区および確認トレンチ	5
第4図　北側トレンチ	6
第5図　南側トレンチ	8
第6図　南側トレンチ出土遺物分布	10
第7図　ピット群出土遺物	10
第8図　弥生土器	10
第9図　土師器・須恵器等(1)	10
第10図　土師器・須恵器等(2)・土製品	11

図　版　目　次

図版1　遺跡周辺空中写真
図版2　遺跡景観・北側トレンチ
図版3　南側トレンチ
図版4　南側トレンチ・出土遺物(1)
図版5　出土遺物(2)
図版6　出土遺物(3)

I 調査の経緯と経過

一般県道・茂原環状線は、茂原市の市街地外周を廻る実延長24kmの道路である。今回の道路改良事業は、千葉県が実施している「茂原都市計画」に基づく住宅市街地基盤整備事業の一環であり、広域交通ネットワークの構築、渋滞解消、将来の交通需要増加への対策、通過交通と生活交通の分離・適正化の推進などを目的とするものである。事業計画に当たり、工事の必要な範囲に本遺跡が存在するため、千葉県教育委員会では、取り扱いについて関係機関と協議を行い、工事の方法等を検討した。その結果、やむを得ず記録保存の処置を講ずることとなり、財団法人千葉県教育振興財団文化財センターが委託を受けて発掘調査と整理作業を実施した。

事業範囲は、茂原市小林1376ほかの1,726m²であるが、中央に岩盤が露出して近年削り込まれた部分があり、その640m²を除いた1,086m²を調査対象とし、平成19年9月3日から9月14日までに250m²の確認調査を実施した。調査は、井戸、ピット群、水田跡等と推定される遺構を確認し、周囲を拡張した上で確認調査のなかで必要な記録保存を終了した。

発掘調査及び整理作業に係わる期間、担当者及び作業内容は、下記のとおりである。

(発掘調査)

平成19年度

期 間 平成19年9月3日～平成19年9月14日

担当者 中央調査事務所長 折原 繁

上席研究員 小高幸弘

内 容 上層確認調査 250m²／調査対象面積 1,086m²

(整理作業)

平成19年度

期 間 平成19年12月3日～平成19年12月27日

担当者 中央調査事務所長 折原 繁

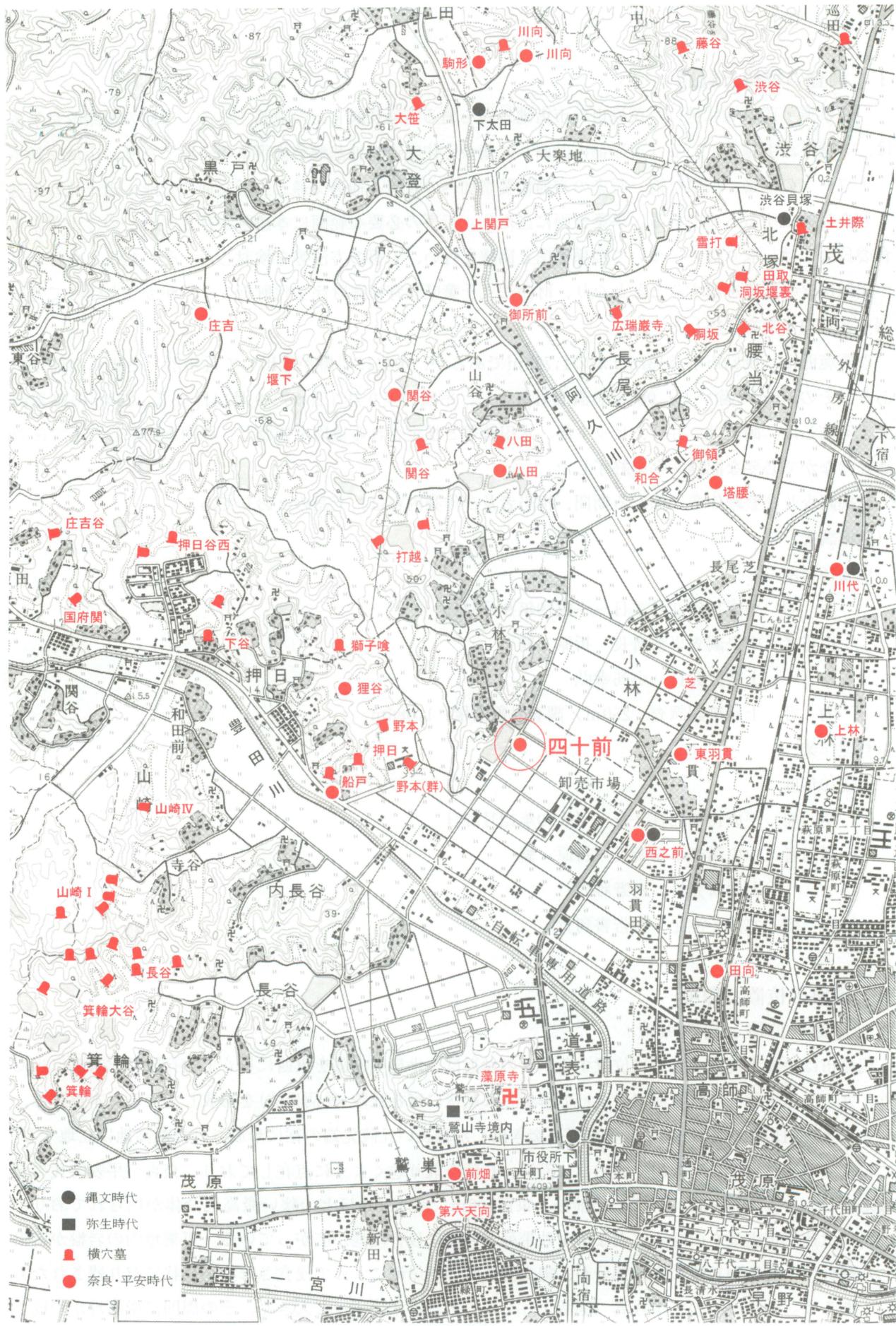
上席研究員 西野雅人

内 容 水洗・注記～報告書刊行

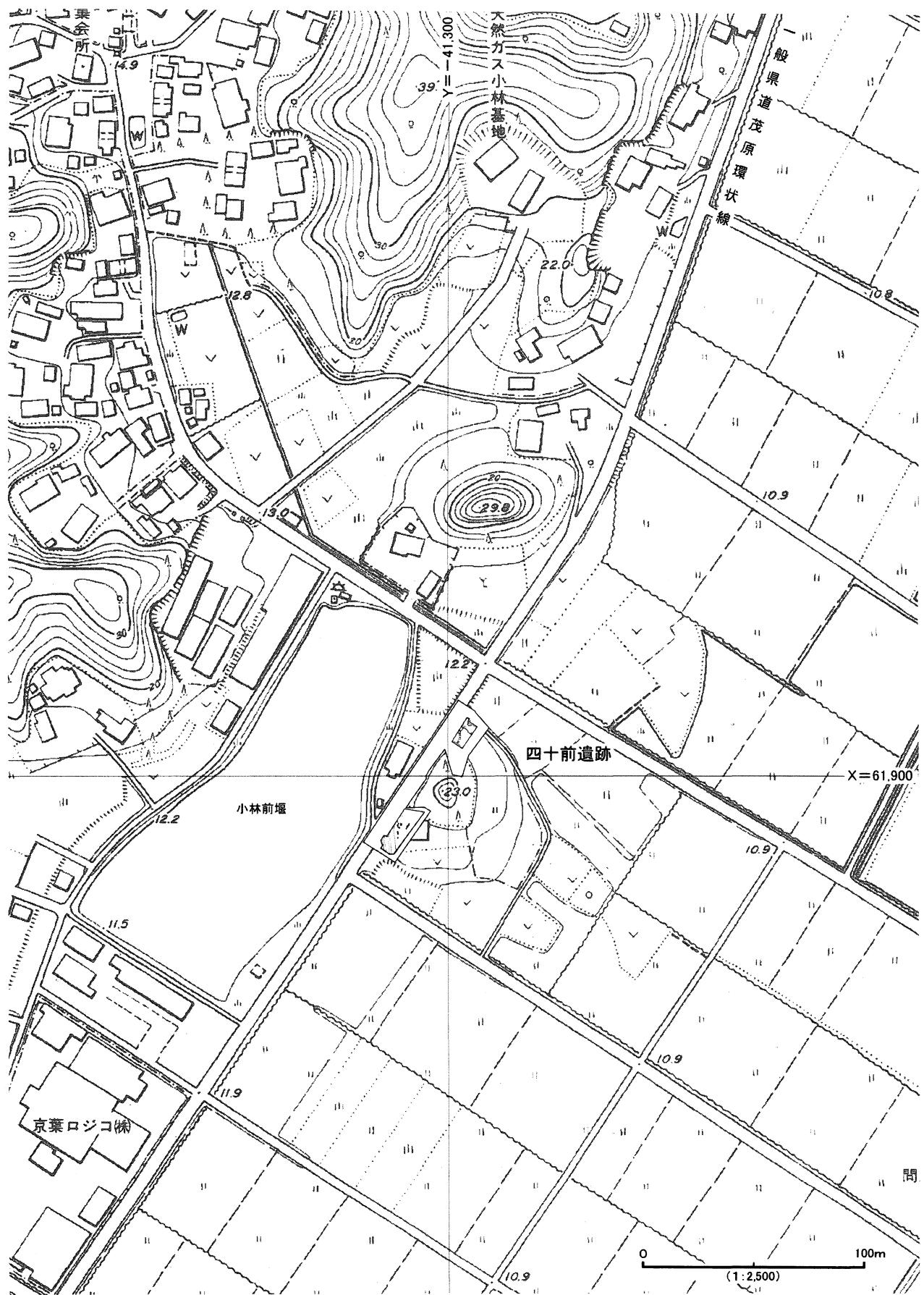
II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と自然環境

茂原市は房総半島の中央部に位置する。この付近は、半島中央部を東西に貫く上総丘陵の北端部に当たり、九十九里平野を流れる河川によって解析され起伏に富む丘陵(長柄丘陵)を形成している。本遺跡は、阿久川と豊田川に挟まれ、九十九里平野に突き出した細長い丘陵先端の裾に形成された微高地に立地する。このような微高地は、阿久川や豊田川に沿い、丘陵を取り巻くように点在しており、奈良・平安時代の包蔵地が目立つ。本遺跡は、標高11m前後、東西100m、南北80mほどの狭い微高地全体が括られており、周囲には茂原市街地をのせる広大な第1砂帯列との間に後背湿地が広がっている。事業地内の岩盤が露出した部分は、北側の丘陵の先端部分が、縄文海進時の沿岸流によって浸食されて小島状に取り残されたものであろう。昭和58年の空中写真(図版1)をみると、本来はずっと大きく、その周囲に微高地が形成されていた。西側の丘陵先端との間の細い埋没谷には溜池である小林前堰が造られている。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 遺跡周辺の地形

2 周辺の遺跡（第2図）

本遺跡の東側に位置する西之前遺跡で見つかった縄文前期後半の土器¹⁾は、縄文海進後の砂堤帯形成と平野部にいち早く進出した人々の足取りを示すものである。しかし、旧石器時代から縄文時代前半期の生活痕跡は、丘陵地帯の分水嶺付近に偏っていたようであり、九十九里平野に本格的に進出し始めたのは約5,000年前の縄文中期の人々であった。茂原市川代遺跡では、内向きの顔面把手をもつ勝坂式土器が出土している²⁾。茂原市指定史跡の宮ノ下遺跡では、中期末ないし後期初頭の完形土器が出土している。多数の人骨や出土遺物で注目を集めた市指定史跡・下太田貝塚³⁾も、中期から晩期にかけての遺跡である。弥生時代後期から古墳時代前期には、砂堤帯上や丘陵裾部に集落が形成されはじめた。宮島遺跡⁴⁾では竪穴住居跡9軒等が、国府関遺跡では大量の木製品や北陸系・東海系を含む土器が出土している⁵⁾。

丘陵斜面に連綿と掘り込まれた横穴墓群は長生地区の最大の特色である。横穴墓の多い千葉県のなかで、長生郡域にはその29%が存在しており、高壇式と呼ばれる特異な構造が発達することや、出土遺物の豊富さなども特筆されるところである⁶⁾。ただし、墳墓数から想定される7世紀代の多くの人口を支えた集落の実態は未解明であり大きな課題となっている。一宮川と鶴枝川の自然堤防上に立地する中原遺跡は、この時期の住居跡が集中する数少ない事例である⁷⁾。丘陵裾部や砂堤帯上に遺跡が増えるのは、奈良・平安時代に入ってからのことである。当地域は、初期荘園の事例として注目される「藻原荘」推定地に隣接する⁸⁾ことから、この時期の発掘調査の成果が期待されている。

註 1 津田芳男 1985『小林西之前遺跡』茂原市文化財センター

2 今泉潔 2002『茂原市川代遺跡』千葉県文化財センター

3 菅谷通保他 2003『下太田貝塚』総南文化財センター

4 津田芳男 1995『宮島遺跡』長生郡市文化財センター

5 小久賀隆史他 1993『国府関遺跡群』長生郡市文化財センター

6 萩原恭一 2007「横穴を造った人びと」『千葉県の歴史 通史編 原始・古代1』千葉県

7 菅谷通保・松本晶久・津田芳男 1994『中原遺跡』長生郡市文化財センター

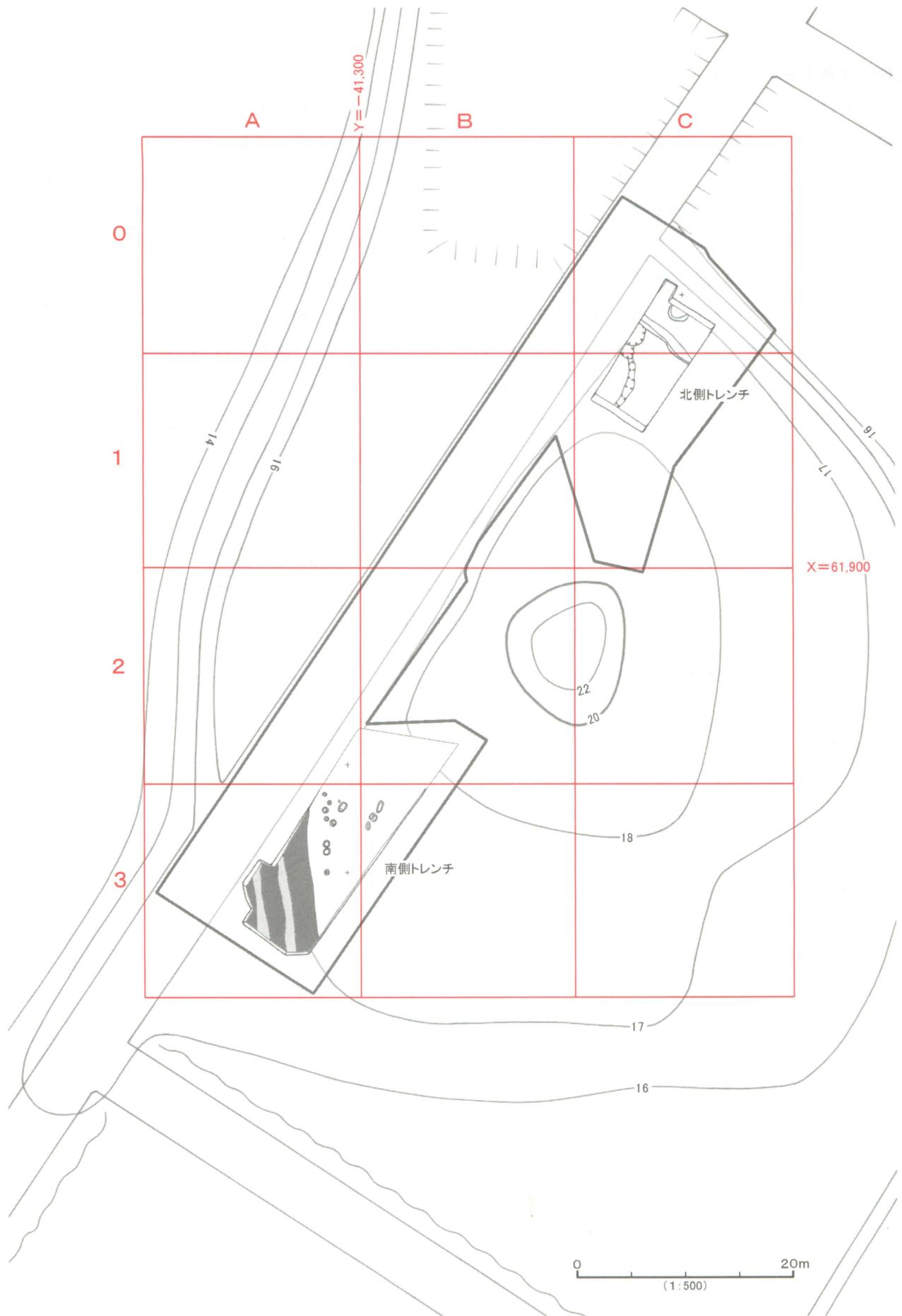
8 加藤友康 2001「上総国の藻原荘」『千葉県の歴史 通史編 原始・古代2』千葉県

III 調査の概要

9月3日より重機による確認トレンチの表土除去を開始した。トレンチは、調査対象範囲の北端と南端に設定し、遺構の有無を確認した。その結果、北側トレンチでは地盤の軟砂岩が露出し、それを水平に削り出した道路状の整地がみられたが時期は明確にできなかった。いくつか浅いくぼみを検出したが、確認調査で井戸と推定したものも含めて明確な遺構は皆無である。出土遺物も乏しい。

南側トレンチでは、遺構確認の成果として、水田跡1面、道路1条、古代の土器を伴うピット群を検出した。そこで、範囲を一部拡張することにした。ただし、現在の県道下部分と、南端の電柱部分は、過去の造成に伴って削平されていることを確認したため、調査不要と判断した。また、ローム層の堆積が認められないため、下層の調査も不要と判断した。

南側トレンチの遺構と古代の遺物が集中する部分は精査と記録を行った。また、基本層序の確認のため、トレンチ壁際の一部を深く掘り下げて記録を行った。なお、南側トレンチで検出した水田跡については、安全面の限界から掘り下げを行わなかった。

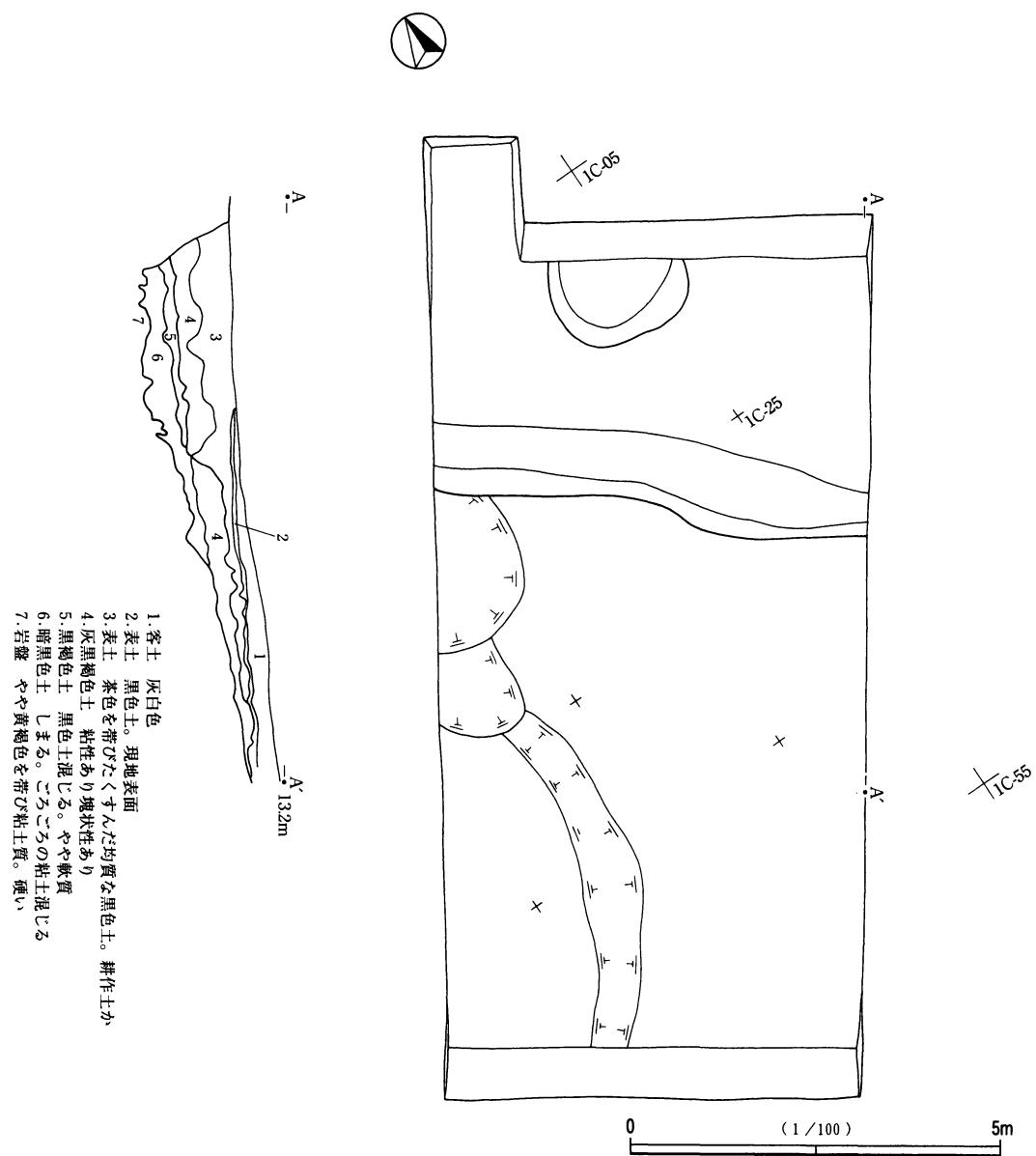


第3図 調査区および確認トレンチ

(1) 北側トレンチ (第4図)

1層はごく最近の客土であり、2層が現代の地表面である。3層は耕作土とみられた。これらの表土を除去すると、南端部では基盤の軟砂岩がすぐに露出し、調査不要としたマウンド状の部分に連続することを確認した。北側の3分の2ほどは、緩やかに傾斜する平坦面を形成しており、人為的なものとみられる。これより以北は、やや傾斜が強くなるとともに底面にはやや凹凸がみられた。この2つの範囲の境界、即ち傾斜の変換する部分には、微高地の裾を取り巻くように造られた道路とみられる平坦面が存在した。南西側に記録された窪みや、溝状の落ち込みは性格を明らかにできなかった。北東境界の平面円形の掘り込みは、調査時点では水留め状の井戸と推定したが、深さは30cm、もし掘り込み面が5層上面であったとしても50~60cmに過ぎず、整理段階で井戸の可能性は低いと判断した。性格不明の土坑としておく。なお、全体を掘り下げた後に壁面が崩壊したため最終段階の記録ができなかった。

出土遺物は、表土中から出土したコップ形の須恵器底部片（第10図43）、大形の管状土錐（44）のみであり、平坦面や道路の時期は特定できない。43は表面の摩滅が著しい。



第4図 北側トレンチ

(2) 南側トレンチ（第5図）

土層断面図5層から古代の土器と弥生土器が多数出土したので、位置を記録して掘り下げ、6層の上面付近で遺構確認を行ったところ、P1～P13を検出した。ごく浅いP3・P6・P13以外は柱穴等の遺構の可能性があり、一部はピット内からも遺物が出土した。その後、地山であるやや黄褐色を帯びた灰白色粘質土の上面まで掘り下げたが、トレンチの南西部分では、明瞭な境界をもって旧水田面とみられる遺構を検出した。安全面から、掘り下げることはできなかったが、その上面で道路と畦畔を検出した。

IV 検出した遺構と遺物

1 遺構

(1) ピット群（第5・7図、図版4）

土器の集中する5層を掘り下げた後、6層上面付近でP1～P13を検出した。ごく浅いP3・P6・P13を除いたピットは、何らかの建物に伴う柱穴等の遺構であった可能性がある。第7図1・2はP7から出土した須恵器杯である。底面・体部下端を手持ちヘラケズリ調整する。1は一部欠損するものの保存が良く、ピットの底から出土している（図版4）。2も杯で底面は回転ヘラケズリ調整である。3はP8から出土した土師器甕口縁部である。いずれも8世紀末～9世紀初頭のものであろう。このほか、弥生土器小片が出土したが、周囲の遺物集中出土のものと同様に磨滅が著しいため、遺構には伴わないと判断した。ピット群には有意な配列がみられないが、8世紀末～9世紀初頭には建物等が存在した可能性がある。

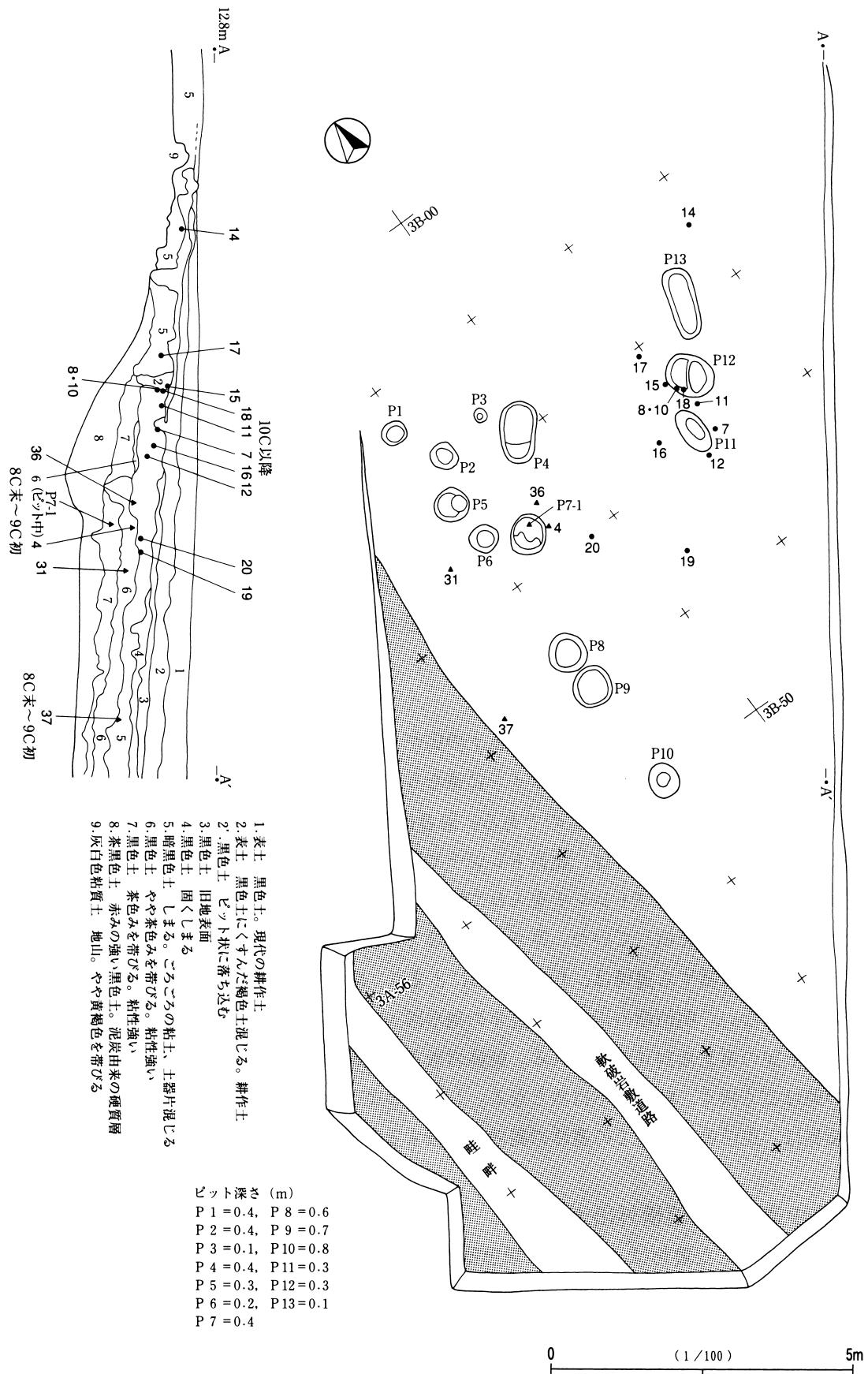
(2) 水田跡・畦畔・道路（第5図、図版3）

トレンチの南西部で、水田面とみられる黒色土の広がりを検出した。微高地と水田面の境界は、第3図のように現地表面の標高17mのコンターラインに重なり、ほぼ南北の地割を示す。第5図で畦畔・道路とした部分は、この地割りと並行するものである。前者は、幅0.6m～1.0m、長さ6.0mほどの範囲が灰色土となっているものである。後者は、北側トレンチで見られた基盤岩の破片を敷き詰めた幅0.9～1.0mの道路状遺構である。1か所サブトレンチを入れて観察したところ、黒色土を溝状に掘り下げた後、細かく碎いた軟砂岩ブロックを充填していた。厚さは中心部で26cmを測る。

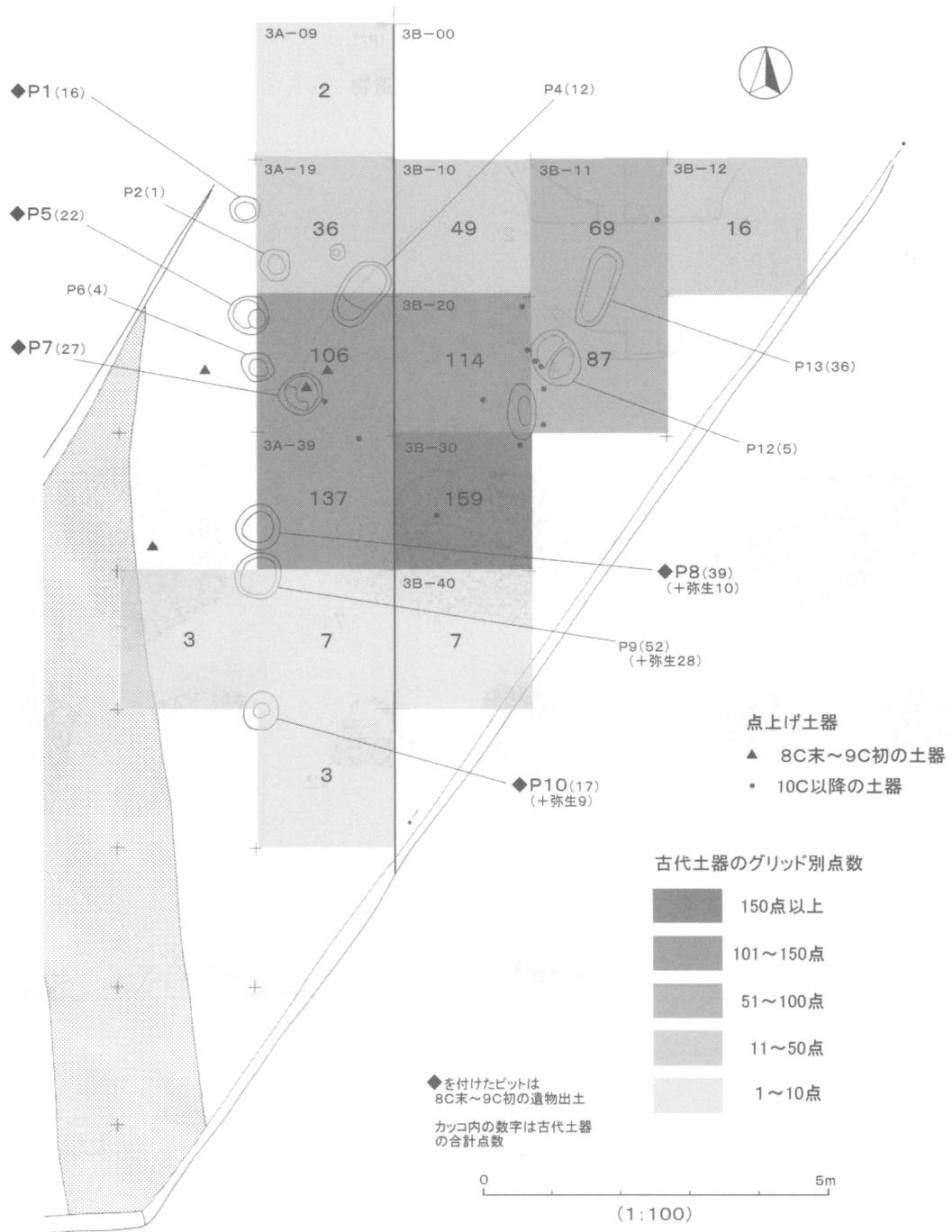
これらの水田跡と付随する遺構は、上面の検出に止まり、掘り下げることはできなかった。したがって、時期の特定はできない。明治期の迅速図や近年の地形図・空中写真等を瞥見した限りでは、図版1の昭和58年ころに、上記の南北地割りがみられる。軟砂岩敷きの道路は新しいものかもしれない。ただし、茂原環状線との間はごく狭く、畦畔は不自然となる。したがって、水田跡は比較的古くに遡る可能性がある。湿田との境界は、生活の場としての遺跡の範囲も示唆するものである。

2 遺物集中遺構及び遺構外出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、土師器・須恵器等1,158点、弥生土器51点、鉄製品4点、土錐2点の総計1,213点である（第2表）。その大半は南側トレンチの長さ12m、幅6mほどの範囲から出土した古代の土器であり、ごく狭い範囲から点数にして1,000点余りが出土している（第6図）。位置を記録したものみると、①8世紀末～9世紀初頭の土器は6層とP7・P8から、②10世紀以降の土器は5層から出土しており、例外はない（第5図）。この状況から、グリッド一括取り上げの非掲載資料も含めて、層位的に



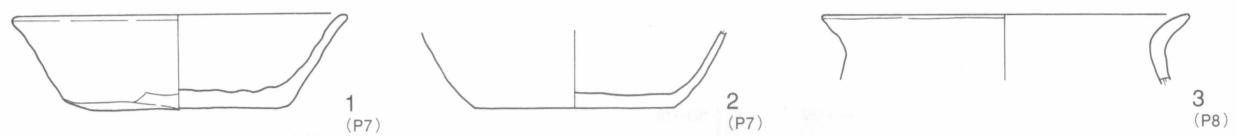
第5図 南側トレント



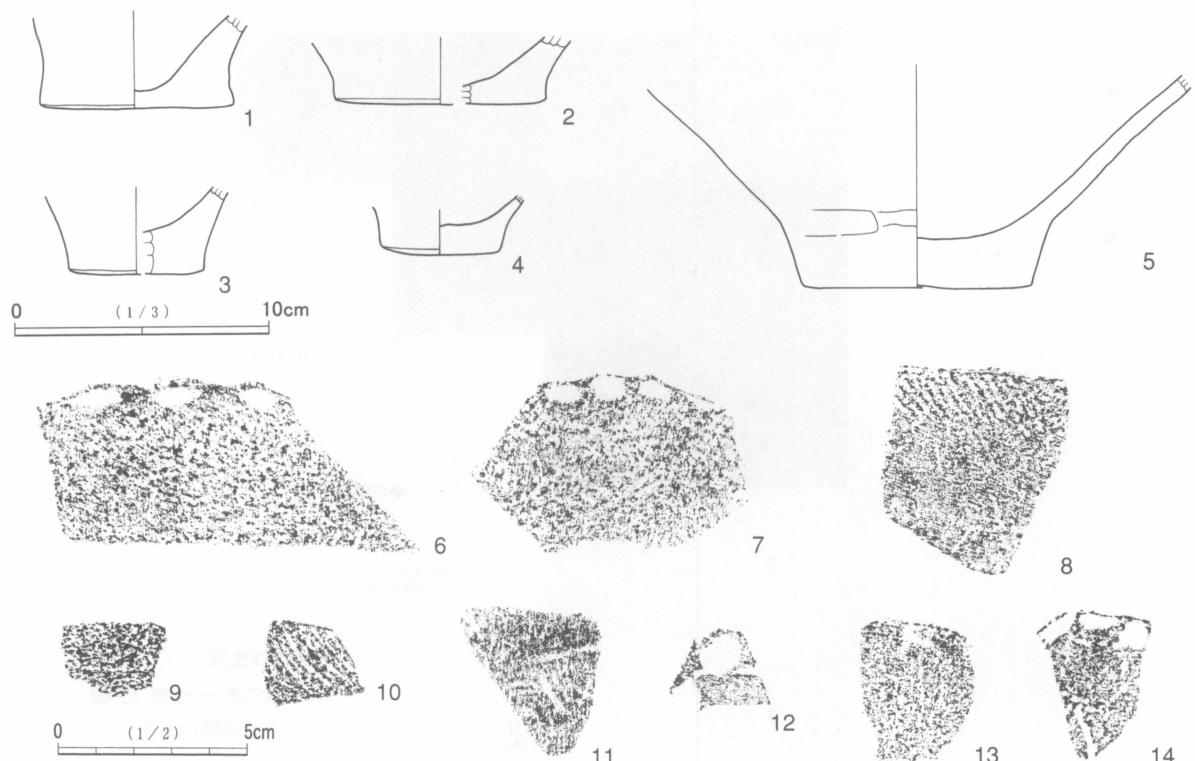
第6図 南側トレンチ出土遺物分布

も時期的にもまとまりをもつて括性の高い資料であるとみて、遺物集中遺構の扱いとした。

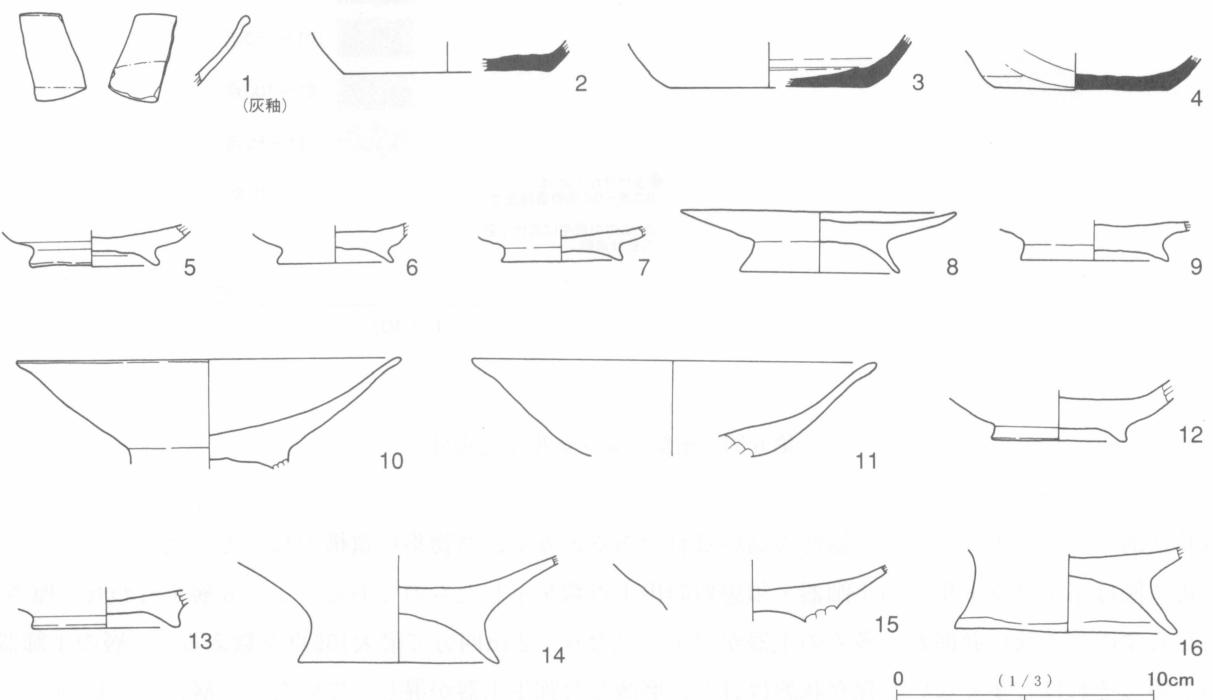
第6図は小グリッド単位の土師器・須恵器の出土点数を示したものである。5・6層を合わせて厚さ50cm足らずのごく狭い範囲から多くの土器が出土しており、2m四方で最大159点を数える。6層の土師器・須恵器はそれほど多くないが保存状態は良く、磨滅した弥生土器が混じっていた。5層は厚さ10cmほどの層であり、10世紀以降の土器がとくに集中していた。個体数はきわめて多く、大破片が多いが、すべて磨



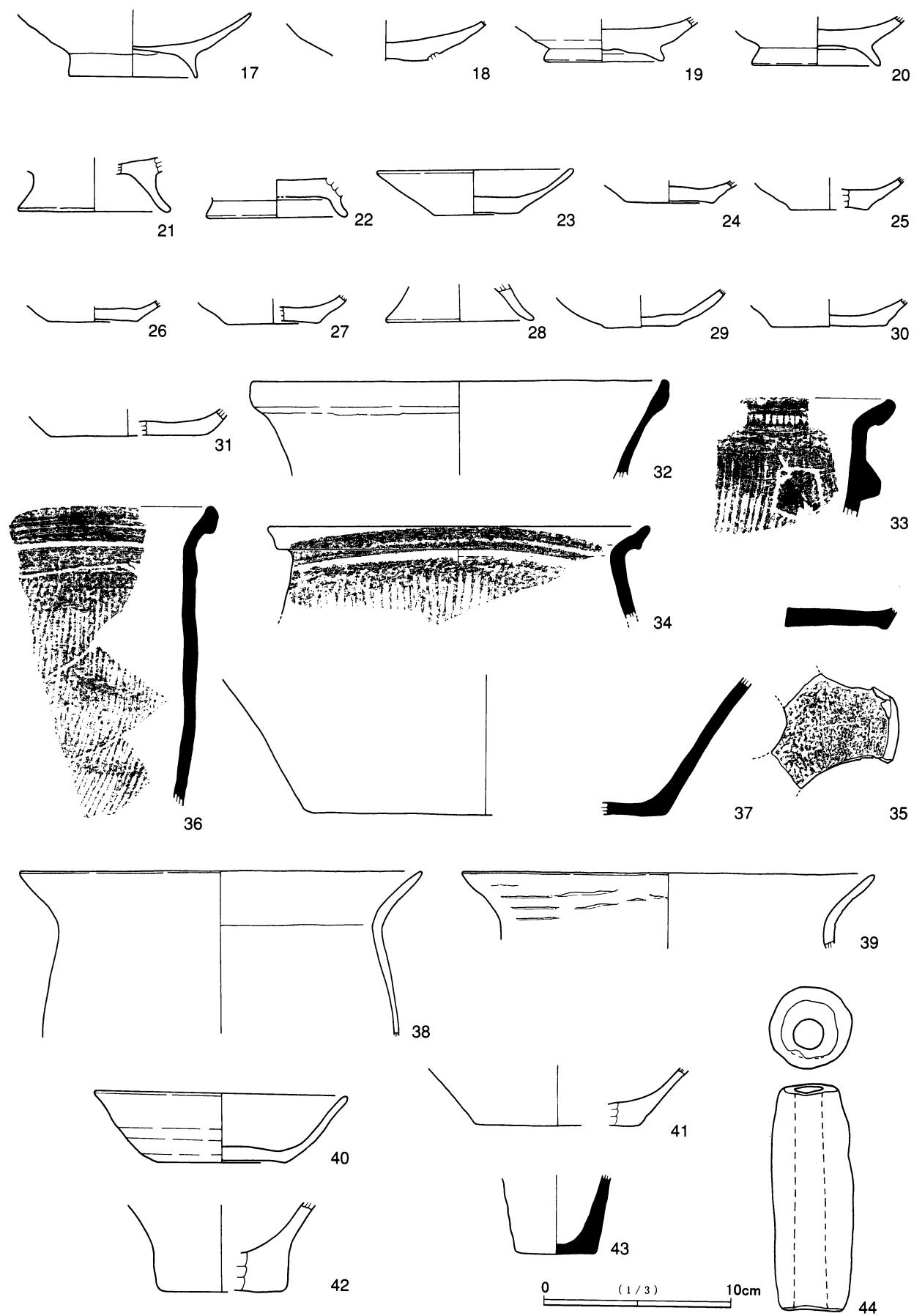
第7図 ピット群出土遺物



第8図 弥生土器



第9図 土師器・須恵器等(1)



第10図 土師器・須恵器等(2)・土製品

第1表 出土遺物

遺構出土土器（保管用整理区分=土器A I）

通	第図	No.	遺構	種別	器形	口径	底径	器高	遺存%	色調	JIS	成形・調整・特徴	備考	注記
1	第7図	1	P7	須恵器	杯	12.8	8.8	3.8	60	灰	5Y6/1	底面・体部下端手持ちヘラケズリ	ピット底	P7-1
2	第7図	2	P7	須恵器	杯	—	8.0	—	40	灰黄	2.5Y6/2	底面回転ヘラケズリ、体部下端手持ちヘラケズリ	ピット一括	P7-2
3	第7図	3	P8	土師器	甕	14.3	—	—	10	橙	5YR6/6		ピット一括	P8-1
4	第9図	1	遺物集中	灰釉	杯	—	—	—	10	灰	N6/0	口縁。内部上部1/2～外 面灰釉。口唇内面以外は ごく薄い。遺存良好	一括	3B-11-2
5	第9図	2	遺物集中	須恵器	杯	—	8.2	—	10	灰	N5/0	底部。底面・体部下端手 持ちヘラケズリ	一括	3A-19-1
6	第9図	3	遺物集中	須恵器	杯	—	7.6	—	10	にぶい橙	7.5YR7/3	底部。底面・体部下端手 持ちヘラケズリ。やや 摩滅。内外面黒色	一括	3A-19-1
7	第9図	4	遺物集中	須恵器	杯	—	6.7	—	50	にぶい褐	7.5/4	底部。底面・体部下端手 持ちヘラケズリ	6層出土	3A-29-2
8	第9図	5	遺物集中	土師器	高台付皿	—	5.0	—	10	橙	5YR6/8	底・台部。全面摩滅。内 面黒色		3A-19-1
9	第9図	6	遺物集中	土師器	高台付皿	—	4.6	1.5	30	橙	5YR6/6	底・台部。全面摩滅。内 面黒色		3B-11-2
10	第9図	7	遺物集中	土師器	高台付皿	—	4.8	—	30	橙	5YR6/6	底・台部。全面摩滅	5層出土	3B-21-5
11	第9図	8	遺物集中	土師器	高台付皿	10.8	6.2	2.4	100	橙	7.5YR7/6	完形。全面磨滅		3B-21-3
12	第9図	9	遺物集中	土師器	高台付皿	—	5.7	—	20	橙	5YR6/6	底・台部。全面磨滅		3B-21-7
13	第9図	10	遺物集中	土師器	高台付杯	15.1	—	—	40	橙	7.5YR7/6	杯身部。全面磨滅。内 面黒色		3B-21-3
14	第9図	11	遺物集中	土師器	高台付杯?	15.9	—	—	25	橙	7.5YR7/6	杯身部。全面磨滅。内 面黒色	5層出土	3B-21-4
15	第9図	12	遺物集中	土師器	高台付杯	—	5.1	—	40	橙	7.5YR7/6	底部～台部。低い高台 全面磨滅。内面黒色	5層出土	3B-30-1
16	第9図	13	遺物集中	土師器	高台付皿	—	5.5	1.5	40	橙	5YR6/6	底・台部。全面磨滅		3B-30-3
17	第9図	14	遺物集中	土師器	高台付杯	—	7.8	4.2	35	橙	5YR6/6	全体の一部。全面磨滅	5層出土	3B-11-1
18	第9図	15	遺物集中	土師器	高台付杯	—	—	—	40	橙	7.5YR6/6	底部。全面磨滅	5層出土	3B-20-1
19	第9図	16	遺物集中	土師器	高台付杯	—	8.7	—	40	橙	7.5YR7/6	底・台部。全面磨滅。赤 み弱い	5層出土	3B-20-3
20	第10図	17	遺物集中	土師器	高台付杯	—	6.8	—	30	橙	5YR6/6	体部下半～台部 全面磨滅	5層出土	3B-20-4
21	第10図	18	遺物集中	土師器	高台付杯	—	—	—	20	橙	7.5YR7/6	体部下半～底部 全面磨滅。内面黒色	5層出土	3B-21-2
22	第10図	19	遺物集中	土師器	高台付杯	—	6.1	2.4	40	橙	7.5YR7/6	体部下半～台部 全面磨滅。内面黒色	5層出土	3B-30-2
23	第10図	20	遺物集中	土師器	高台付杯	—	6.7	—	30	橙	2.5YR6/8	体部下半～台部 全面磨滅。黒色	5層出土	3A-39-1
24	第10図	21	遺物集中	土師器	高台付杯	—	8.2	—	10	橙	7.5YR7/6	底部～台部 全面磨滅。内面黒色	一括	3B-20-7
25	第10図	22	遺物集中	土師器	高台付杯	—	7.3	2.0	10	橙	7.5YR6/6	底部～台部 全面磨滅。内面黒色	一括	3B-30-3
26	第10図	23	遺物集中	土師器	杯	10.6	4.6	2.4	50	橙	7.5YR7/6	小形杯。底面回転糸切り 全面磨滅	一括	3B-30-3
27	第10図	24	遺物集中	土師器	杯	—	4.6	—	10	橙	5YR6/8	小形杯。底面回転糸切り 全面磨滅	一括	3A-39-3
28	第10図	25	遺物集中	土師器	杯	—	4.2	—	10	橙	5YR6/6	小形杯。底面回転糸切り 全面磨滅	一括	3A-39-3
29	第10図	26	遺物集中	土師器	杯	—	4.7	—	20	橙	5YR6/6	小形杯。底面回転糸切り 全面磨滅	一括	3B-20-7
30	第10図	27	遺物集中	土師器	杯	—	5.0	—	10	橙	7.5YR7/6	小形杯。底面回転糸切り 全面磨滅	一括	3B-20-7

通	第図	No.	遺構	種別	器形	口径	底径	器高	遺存%	色調	JIS	成形・調整・特徴	備考	注記
31	第10図	28	遺物集中	土師器	高台付杯	—	8.0	—	10	橙	5YR7/6	台部小片 全面摩滅	一括	3B-20-7
32	第10図	29	遺物集中	土師器	杯	—	3.8	—	20	にぶい黄橙	10YR7/4	小形杯。底面回転糸切り 全面摩滅	一括	3B-21-7
33	第10図	30	遺物集中	土師器	杯	—	6.1	—	15	橙	7.5YR7/6	台部小片 全面摩滅	一括	3B-21-7
34	第10図	31	遺物集中	土師器	杯	—	8.5	—	10	橙	5YR7/8	大きな杯。全面摩滅。内 面黒色	一括	3A-28-1
35	第10図	32	遺物集中	土師器	甕	22.4	—	—	10	明赤褐	2-5YR5/6	口縁外面肥厚。全面ナデ。 酸化色	一括	3A-29-3
36	第10図	33	遺物集中	須恵器	甌	—	—	—	10	にぶい橙	7.5YR6/4	口縁外面折直し→タタキ →頸部ナデ。粘土貼付→ ケズリにより突起形成	一括	3A-19-1
37	第10図	34	遺物集中	須恵器	甌	20.4	—	—	10	灰	5Y5/2	口縁外面折直し。外面タ タキ。口縁ナデ	一括	3B-10-1
38	第10図	35	遺物集中	須恵器	甌	—	—	—	10	灰黄	2.5Y6/2	底面T字状線刻	一括	3B-10-1
39	第10図	36	遺物集中	須恵器	甌	—	—	—	10	灰黄褐	10YR6/2	口縁外面折直し。外面タ タキ。口縁ナデ。全面摩滅	6層出土	3A-29-1
40	第10図	37	遺物集中	須恵器	甕	—	19.3	—	10	灰黄褐	10YR6/2	大形。外面ケズリ→ナデ	6層出土	3A-38-1
41	第10図	38	遺物集中	土師器	甕	21.4	—	8.8	10	橙	7.5YR6/6	口縁外面粘土紐接合痕。 体部縦位ナデ	一括	3B-11-2
42	第10図	39	遺物集中	土師器	甕	22.0	—	—	10	橙	5YR6/6	口縁外面粘土紐接合痕。 体部縦位ナデ	一括	3B-30-3
43	第10図	40	遺物集中	土師器	杯	13.5	6.7	3.9	80	橙	7.5YR7/6	底面回転糸切り。体部下 端へラケズリ	一括	一括
44	第10図	41	遺物集中	土師器	甕	—	8.8	—	10	黄灰	2.5YR6/1	底部小片。全面摩滅	一括	一括
45	第10図	42	遺物集中	土師器	甕	—	6.5	—	10	橙	7.5YR6/6	全面摩滅	一括	一括

遺構出土土器（保管用整理区分=土器A II）

通	第図	No.	遺構	種別	器形	口径	底径	器高	遺存%	色調	JIS	成形・調整・特徴	備考	注記
1	第8図	1	南トレンチ	弥生土器	甕	—	7.6	—	10	にぶい橙	7.5YR7/4	底部。全面摩滅	P 8-1	
2	第8図	2	南トレンチ	弥生土器	甕	—	8.3	—	10	橙（内面）	5YR6/6	底部。全面摩滅	P 8-1	
3	第8図	3	南トレンチ	弥生土器	壺	—	5.4	—	10	にぶい赤褐 (外面)	2.5YR4/5	底部。全面摩滅	P 9-1	
4	第8図	4	南トレンチ	弥生土器	壺	—	4.6	—	—	橙（外面）	5YR6/6	胴下部～底部。摩滅	P 10-1	
5	第8図	5	南トレンチ	弥生土器	甕	—	8.9	—	20	にぶい黄橙	10YR7/2	胴下部～底部。摩滅	一括	
6	第8図	6	南トレンチ	弥生土器	不明	—	—	—	10	にぶい黄橙	10YR6/4	口縁。口唇指頭押圧によ り小波状。全面摩滅	P 8-1	
7	第8図	7	南トレンチ	弥生土器	不明	—	—	—	10	にぶい橙	7.5YR6/4	口縁。口唇指頭押圧によ り小波状。全面摩滅	P 8-1	
8	第8図	8	南トレンチ	弥生土器	壺	—	—	—	10	灰白	5Y7/1	単節R Lか。全面摩滅。白味強い 自身強い	P 8-1	
9	第8図	9	南トレンチ	弥生土器	不明	—	—	—	10	橙	7.5YR6/6	小片。全面摩滅	P 8-1	
10	第8図	10	南トレンチ	弥生土器	壺	—	—	—	10	にぶい黄橙	10YR7/4	小片。単節R Lか。	P 8-1	
11	第8図	11	南トレンチ	弥生土器	壺	—	—	—	10	にぶい黄橙	10YR6/4	頸部。樹描意匠文。全面 摩滅。摩滅した内面黑色	P 9-1	
12	第8図	12	南トレンチ	弥生土器	甕	—	—	—	10	にぶい黄橙	10YR6/4	口縁。口唇指頭押圧によ り小波状。全面摩滅。内 面黑色化	P 9-1	
13	第8図	13	南トレンチ	弥生土器	甕	—	—	—	10	にぶい橙	7.5YR6/4	口縁。口唇指頭押圧によ り小波状。全面摩滅	P 9-1	
14	第8図	14	南トレンチ	弥生土器	甕	—	—	—	10	にぶい黄橙	10YR6/4	口縁。口唇指頭押圧によ り小波状。全面摩滅	南側トレンチ一括	
15	第10図	43	北トレンチ	須恵器	小型壺	—	4.2	—	10	灰白	7.5YR7/1	コップ形。底部。全面摩 滅	北トレンチ-1	

遺構外出土土製品（保管用整理区分=土製品A II）

通 第図	No.	遺構	種別	器形	長さ	径	孔径	遺存%	色調	備考	注記
1	第10図	44	北トレンチ	管状土錘	11.9	4.1	1.9	100	橙	2.5YR6/8 ぼぼ完形	漁網錘 北トレンチ-1
2	-	-	南トレンチ	管状土錘	-	-	-	10	橙	小片。孔径1.9cm程度	漁網錘 3B-20-2

遺構外出土金属製品（保管用整理区分=金属製品A II）

通 第図	No.	遺構	種別	長さ	重量	特徴	備考	注記
1	-	-	南トレンチ 羽口	3.9	11.0	羽口先端部小片か。支脚状の土製品の縁辺が高温の被熱で溶解し灰色に変化・発泡	一括取り上げ	3B-20-7
2	-	-	南トレンチ 鉄滓	3.3	29.0	重い鉄滓。磁着度なく鏽び認められない	一括取り上げ	3B-30-3
3	-	-	南トレンチ 鉄製品？	6.2	10.0	鉄製品 or 高師小僧。中心は刀子等に似た鉄。周囲泥・錆厚く衣をなす	一括取り上げ	3A-29-3
4	-	-	南トレンチ 鉄製品？	11.7	122.0	鉄製品 or 高師小僧。中心は厚い鉄。周囲泥・基盤層上面出土 錆厚く衣をなす	3B-21-6	

第2表 出土遺物集計

位置	須恵器	土師器	古代計	弥生土器	鉄	土錘	時期	備考
調査合計	189	969	1158	51	4	2		総計1213点
南側トレンチ計	177	921	1098	51	4	1		
ピット群計	29	202	231	47	0	0		
P 01	4	12	16				8~9C	須恵杯2十・甕類1、土師杯1
P 02	1		1					須恵ごく小片1
P 03			0					遺物なし
P 04		12	12					摩滅顯著な小片のみ
P 05	5	17	22				8~9C?	須恵大甕?1、土師杯小片多
P 06	1	3	4					摩滅顯著な小片のみ
P 07	7	20	27				8~9C	須恵杯3、甕・壺1
P 08	1	38	39	10			8~9C	土師甕1、他は磨滅小片
P 09		52	52	28				小片多だが磨滅小片のみ
P 10	2	15	17	9			8~9C?	須恵甕1、他は磨滅小片
P 11			0					遺物なし
P 12		5	5					磨滅小片のみ
P 13	8	28	36					須恵杯2・甕1、土師甕1
遺物集中計	138	657	795	0	4	1		
3A-09	1	1	2					8・9Cと10C以降土師多
3A-19	21	15	36					10C以降土師多
3A-29	38	68	106				10C	10C以降土師多
3A-39	24	113	137				10C	
3A-48		3	3					
3A-49	3	4	7					
3A-59		3	3					
3B-10	11	38	49					10C以降土師あり
3B-11	8	61	69					10C以降土師あり
3B-12		16	16					
3B-20	14	100	114				10C	10C以降土師多。羽口あり
3B-21	6	81	87				10C	10C以降土師多
3B-30	8	151	159				10C	10C以降土師多。鉄滓あり
3B-40	4	3	7					
トレンチ一括	10	62	72	4				
北側トレンチ	11	28	39			1		須恵小形壺磨滅1
全体一括	1	20	21					

滅が著しい。まとめて廃棄された後、5層堆積時になんらかの水の影響を受けている可能性が高い。

なお、弥生土器はP8・P9・P10から土師器・須恵器類に伴って出土したものであるため、遺構外(他の時期の遺構に流入したもの)として扱った。

(1) 弥生土器 (第8図、図版4・5)

P8・P9・P10の隣接する3基のピット内から、古代土器類に混じって47点の弥生土器が出土している。ほかに南側トレンチ一括資料に4点含まれているが、明らかに他の範囲から出土したものは存在しない。したがって、古代の遺構に流入したものとはいえ、ごく狭い範囲から集中して出土したことになる。

摩滅の著しい小片ばかりであるが、第8図1~14の特徴をみる限り、弥生中期後半・宮ノ台式が揃っているようである。弥生時代の遺構の存在は想定できないが、ある程度まとまりをもって出土したことは、この周辺での生産ないし居住の可能性を示唆している。

(2) 土師器・須恵器等 (第9・10図、図版5・6)

ピット群と、その検出面上に堆積した黒色土(5層)からは、土師器・須恵器等が多量に出土しており、灰釉陶器の小片も1点出土した(1)。前述のように8世紀末~9世紀初頭と10世紀以降の2つの時期に明確に区分することができる。

2~4は底面と体部下端を手持ちヘラケズリ調整した須恵器杯である。33~36は須恵器甌である。これらの土器は、P7・P8出土土器と同様に8世紀末~9世紀初頭に比定されるものである。出土層位が明らかな4・6・31・36・37の5点はすべて6層から出土している。時期的にも、層位的にもまとまりをもった資料といえる。

ただし、出土資料の中心を占めるのは、10世紀以降に下るとみられる土師器杯・皿類である。全点に共通して、焼きが甘い上に水摩を受けたらしく、表面の摩滅が顕著であるために調整痕の観察は困難な状態である。5~9・13は比較的低く小さな高台の付く高台付皿である。12・17~20・22は小さな高台が付く高台付杯である。ただし、皿と杯の器形の差は不明瞭である。10・11・14・16・21・28は高い高台が付く大きめの高脚高台付杯である。少なくとも21・28の高台はハの字状に開く。23~27・29・30は小形の杯・皿類である。底面には回転糸切りの痕跡が残る。出土層位が明らかな10点すべてが5層から出土している。非掲載資料のなかにもさらに多くの個体がみられるが、掲載以外の器種は見当たらない。時期的・層位的に一括性が高く、均一な器種構成を示す良好な資料ということができよう。この時期の土器のまとまった報告例は少なく貴重である一方、編年的な位置づけは難しいようである。杯・皿類のみの一括出土事例は、祭祀・儀礼的な性格を想定するのが通例であろうが、同時期の類例には甌類の少ない構成が多いようであり、即断はできない。

(3) 土製品 (第10図、図版6)

土師質の大形管状土錐が2点出土した。掲載した第10図44はほぼ完形である。長さ11.9cm、最大径4.1cm、孔径は1.9~1.6cm、重量は172gを測る。周囲は劣化して全面に水洗時のブラシ目が付いている。周囲を円筒形に整えないタイプであり、孔の大きさから、かなり大きな曳き網などに使われたものであろう。表のみ掲載したもう1点も同様の資料である。いずれも時期は限定できない。

(4) 金属製品

3B-20・3B-30で製鉄関連遺物が各1点出土している。第1表1は羽口、2は鉄滓である。一括取り上げであるが、10世紀以降の遺物集中に伴う可能性が高い。

V まとめ

弥生時代 平野部では弥生後期から古墳時代前期の資料に見るべきものが多いが、今回、弥生中期後半の宮ノ台式土器がある程度まとめて出土したことは特筆に値しよう。

平安時代 本遺跡のような狭小な微高地から多量の土器類が出土することは予想外のことであった。良好な遺構にこそ恵まれなかつたものの、8世紀末～9世紀初頭及び10世紀以降の土器がそれぞれまとめて出土した。8世紀末～9世紀初頭という年代は、前述の「藻原荘」の年代に重なる点で注目される。すでに多くの発掘報告書で注意されているところであるが、簡単に触れておく。

「藻原荘」は、上総国司をつとめた藤原黒麻呂が、国司在任中（774年3月～779年2月？）に開墾を進め、子の春継、孫の上総權介良尚が領有し、曾孫の菅根の代に興福寺に寄進されたものである。『朝野群載』所収の藤原菅根ら一族六名の連署による寛平二年（890）8月5日の「施入帳」によって、黒麻呂が牧として入手した後、開墾して墾田としたこと、その後4代に渡り相続・伝領されたこと、藤原氏の氏寺である興福寺僧の財源として寄進したことなど、成立から寄進に至るまでの経緯を知ることができる¹⁾。黒麻呂の国司在任当時は、道鏡政権崩壊後で、藤原良継（宿奈麻呂）－藤原魚名という上総守経験者が相次いで政権首班の座に就いていた。また、上総守は黒麻呂の後、1年を置いて同じ藤原南家の刷雄が任じられている（『続日本紀』宝亀五年～天応元年）。こうした背景も、藤原氏の私領拡大に有利に働いたのではないか。

藻原荘の荘域については複数の説が存在するが、豊田川の南側一体が想定されており、本遺跡付近は推定域の北側隣接地にあたる。付近の発掘成果をみると、本遺跡東側の後背湿地を挟んだ対岸の砂堆上に立地する田向遺跡・野際遺跡、阿久川河口低地北岸の和合遺跡、同谷奥の庄吉遺跡・関谷遺跡、豊田川水系の下谷遺跡・狸谷遺跡等、8世紀後半～9世紀の遺構・遺物の出土例はとても多いといえる²⁾。その分布範囲は、藻原荘の荘域を大きく超えており、この時期の開発が寄進の記事に残された以外の土地にも及んでいた可能性を視野に入れるべきことを示唆する。

「藻原荘」に関わる史料と当地域の古代の発掘成果は、王臣家による初期荘園経営を具体的に知り得る数少ない事例として関心が寄せられてきた。律令制の崩壊や荘園の成立といった全国的な視点からも、上総国山辺郡や下総国印旛郡の発掘成果が明らかにした、8世紀後半～9世紀代のさらに大規模な土地開発の内容・性格を解明する手掛かりとしても、今後の発掘調査とその研究が注目されるところである。今回、8世紀末～9世紀初頭の遺構・遺物が出土したことによって、阿久川・豊田川に沿って丘陵裾等に点在する古代遺跡の年代がひとつ明らかになったことは成果といえる。10世紀～11世紀は、上総地域全体として台地上の集落の多くが消滅して実資料が少なく、未解明の部分が多い年代である。この時期のまとまった資料が得られたことも成果のひとつであり、史料の増える中世との間の空白を埋めるものとして注目される。今回の調査の成果は決して大きなものではないが、このような小さな成果の積み重ねが重要な意味をもつものと期待される。

註1 星野 正1966「武士と荘園」『茂原市史』茂原市

加藤友康1995「上総国藻原荘について－「施入帳」の検討を中心として－」千葉県史研究3

2 津田芳男1985『小林西之前遺跡』（茂原市文化財センター）。風間俊人1993『野際遺跡』、風間俊人1994『田向遺跡』、菅谷通保・津田芳男・松本晶久1994『中原遺跡』、松本晶久1994『和合遺跡』、津田芳男1995『宮島遺跡』、加藤修司1996『庄吉遺跡』、加藤修司1996『長尾遺跡群』（以上長生郡文化財センター）

写 真 図 版



遺跡周辺空中写真（昭和58年）



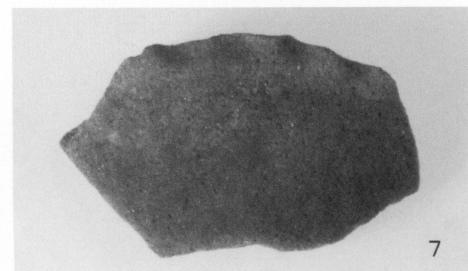
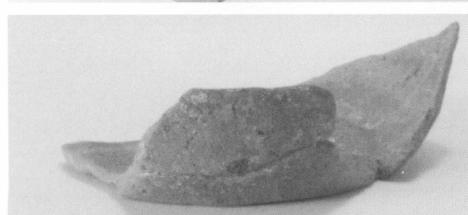
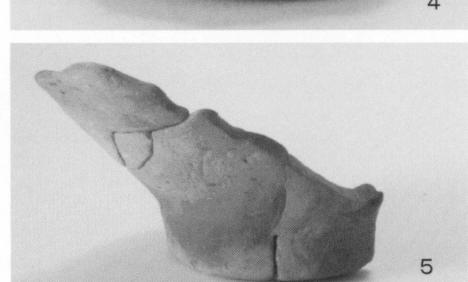
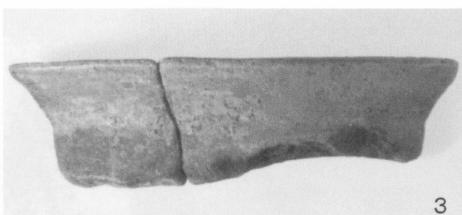
北側トレンチ

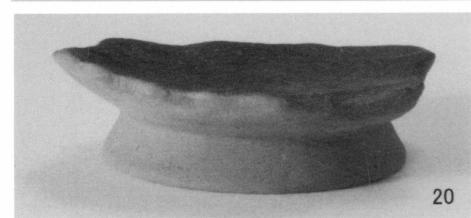
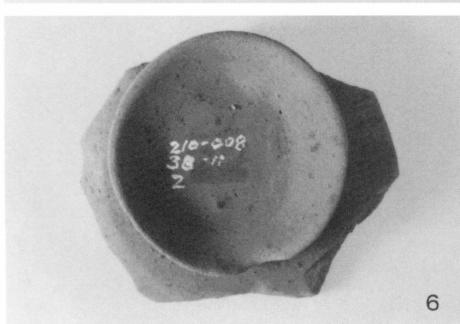
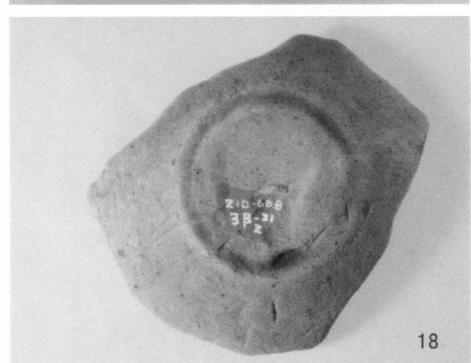
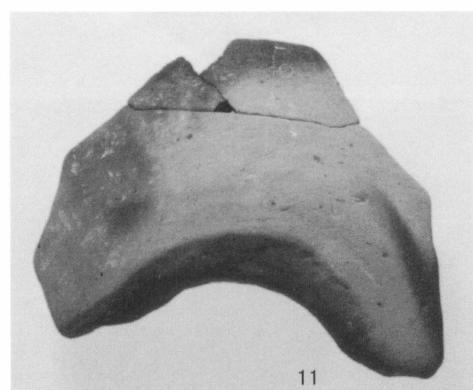
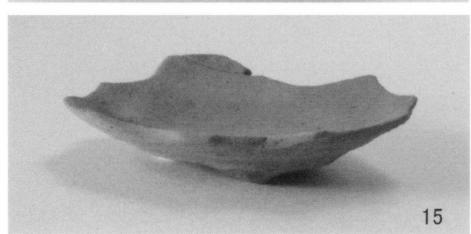
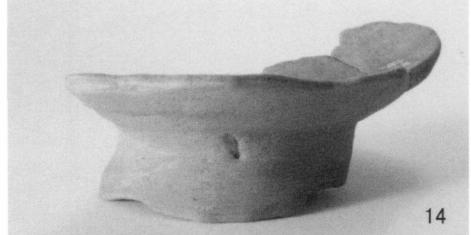
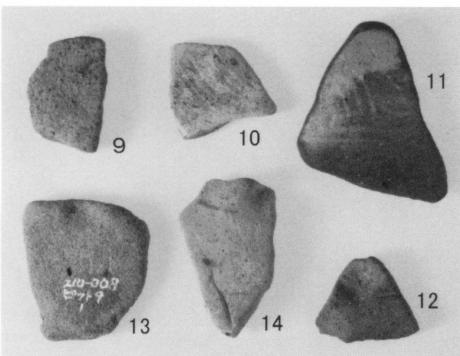
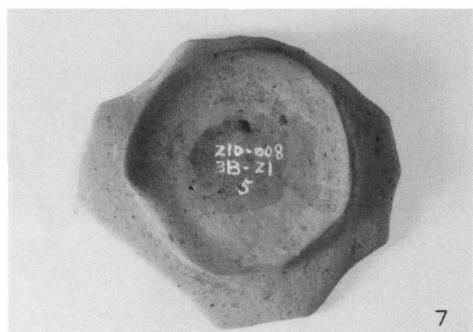


南側トレンチ



図版 4





土師器・
須恵器等

図版 6



報告書抄録

ふりがな	もばらししじゅうまえいせき
書名	茂原市四十前遺跡
副書名	茂原環状線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書
卷次	
シリーズ名	財団法人千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第599集
編著者名	西野雅人
編集機関	財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL. 043-424-4848
発行年月日	西暦2008年3月25日

所収遺跡	所在地	コード		経緯度		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東經			
四十前遺跡	千葉県茂原市小林1376 ほか	12210	008	35度 26分 39秒	140度 17分 07秒	20070903～ 20070914	1086m ²	茂原環状線建設に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
四十前遺跡	包蔵地	弥生時代 平安時代 不明	ピット群 遺物集中 水田跡	弥生土器 土師器・須恵器、鉄滓	丘陵裾部の狭小な微高地から、8世紀末～9世紀初頭と10世紀ころの土器が多数出土した。

要約	遺跡は、阿久川と豊田川に挟まれ、九十九里平野に突き出す細長い丘陵先端の裾に形成された微高地に立地する。2本のトレンチを設けて1,086m ² の発掘調査を実施した。出土遺物は、古代の土器1,158点、弥生土器51点、鉄製品4点、土錘2点である。遺物の中心は、長さ12m、幅6mほどの狭い範囲から出土した1,000点を超える古代の土器群である。8世紀末～9世紀初頭の須恵器・土師器が遺物集中層下部とピット群から、10世紀以降の土師器が遺物集中層上部からそれぞれ出土しており、二つの土器群は層位的にも年代的にも明瞭に区分される。とくに多い10世紀以降の土師器には、高台付皿・杯、小形の杯・皿などがみられ、鉄滓2点を伴う。均一な器種構成を示す良好な資料であるが、年代的な位置づけは難しい。遺跡の位置は、8世紀後半の所謂初期莊園の事例として関心が寄せられてきた「藻原莊」の推定莊域に隣接する。今回、8世紀末～9世紀初頭の遺構・遺物の出土により、阿久川・豊田川沿岸の丘陵裾に点在する古代遺跡の年代をひとつ明らかにすることができた。また、10世紀以降の土器群は、上総地域全体として実資料が少ない時期の貴重な資料といえる。
----	---

千葉県教育振興財団調査報告第599集

茂原市四十前遺跡
—茂原環状線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—

平成20年3月25日発行

編 集 財団法人 千葉県教育振興財団
文化財センター

発 行 千葉県県土整備部
千葉市県千葉市中央区市場町1-1
財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 株式会社 ライフ
成田市東和田595
